

麦秋

1951 年制作 / 松竹 / 124 分

脚本：野田高梧 小津安二郎 監督：小津安二郎

出演：笠智衆 原節子 淡島千景 杉村春子 佐野周二 他

溝口健二、黒澤明らと共に海外でも高く評価されている小津安二郎監督の代表作の一つ。1949 年の「晩春」以来、「宗方姉妹」「麦秋」「お茶漬の味」、1953 年の「東京物語」と名作を次々と発表しました。本作では、お馴染み笠智衆は、原節子の父親ではなく、この家の長男の医師を演じます。原節子は妹の役ですが、この二人の間に亡くなった次男がいます。一切、映画に登場しない次男が大きな役割を



果たします。小津の中には戦争で大切な誰かを失うことの悲しみがあつたのかも知れません。

本作は、北鎌倉に住む老植物学者、間宮一家の物語です。息子の康一（笠智衆）は医者で東京の病院に通勤、娘の紀子（原節子）は丸ノ内の貿易会社専務佐竹の秘書。佐竹の行きつけの料亭の娘アヤ（淡島千景）は紀子と学校時代からの親友で二人共未婚でした。

そんな時、大和の本家が上京して、紀子の結婚話が出ます。同時に佐竹（佐野周二）も自分の先輩の真鍋という男との縁談をすすめます。間宮家では、康一たちも佐竹からの話に乗り気になり、紀子も幾分その気になっているのですが、古くから間宮家の出入りする矢部たみ（杉村春子）の息子で、康一と同じ病院に勤めている謙吉が、急に秋田の病院へ転勤すると決まった時、紀子の気持ちが揺らぎます……。

本作は、戦後大家族が崩壊していく物語でもあり、価値観が変わった女性たちの「自らをよし」とする生き方を描いたものでもあります。

小津監督自身は、本作において「ストーリーそのものより、もっと深い《輪廻》というか《無常》というか、そういうものを描きたいと思った」と述べ、脚本を担当した野田高梧は「彼女（紀子）を中心にして家族全体の動きを書きたかった。あの老夫婦もかつては若く生きていた。（中略）今に子供たちにもこんな時代がめぐって来るだろう。そういう人生輪廻みたいなものが漫然とでも感じられればいいと思った」と語っています。また本作は野田自身が一番気に入っていた脚本で、彼は『東京物語』は誰にでも書けるが、これはちょっと書けないと思う」とも発言していたといひます。

さて、本作では、通常の小津映画ではあまり使われない、クレーンショットや移動ショットも見受けられます。人の歩きなどの動きに合わせて行われることが多いですが、本作では、台詞のやり取りが終わった後で、カメラがゆっくりと無人の廊下をドリーインしたり、歌舞伎の誰もいない客席を横移動してみたり、大学病院の部屋から出て行った後に横に動いたりします。無人の空間をカメラが少し動くのです。それが最後の麦畑の横移動ショットまで続いています。

ものすごく、裏の解釈かも知れませんが、その眼差しは、戦死した次男のやさしい目ではないかという人がいます。また、それは、小津安二郎の親友であり、弟分だった、小津も従軍した戦争で戦死した、映画監督・山中貞雄への鎮魂ではないかとも言われています。そういえば、原節子は、山中貞夫の「河内山宗俊」（1936）に出演しています。何か不思議なつながりを感じてしまいます。



小津作品、もう一本観るなら……「長屋紳士録（1947 年）」「晩春（1949 年）」「東京物語（1953 年）」「お早よう（1959 年）」「秋刀魚の味（1962 年）」がお薦めでしょう。特に「東京物語」は、2012 年発表の英国映画協会発行の「サイト・アンド・サウンド」誌が発表する世界で一番の映画に選ばれています。

日本映画監督協会宛てに『南京で会ってお互いの無事を喜んでおります小津』『悪運の強いのが生き残っています山中』と書き送るも、小津が山中に会う最後となった。

